

「日本史の謎は『地形』で解ける」

第15章 日本文明を生んだ奈良は、なぜ衰退したか

(略)

日本文明の誕生

・・・・・・大航海時代以前の世界の文明において、最大の交流軸はシルクロードであった。世界各地で文明が誕生して以来ヨーロッパと中東とアジアの情報交流をになったシルクロードは、ユーラシア大陸で終着しなかった。シルクロードはユーラシア大陸から東シナ海へと続いていた。

大陸から舟に乗った人々は東シナ海を渡り日本海の出雲や敦賀や福井に上陸していった。一方ではそのまま舟に乗り玄界灘から関門海峡を通過して、瀬戸内海に入る海上ルートをとった人もいた。瀬戸内海には多くの島々が点在し、中国・四国地方の山々が海まで迫っていた。瀬戸内海には文明を作っていく広い土地はなかった。彼らは瀬戸内海を東へ乗へと進んだ。その瀬戸内海の終着地には大坂の上町台地が横たわっていた。彼らは波が速く険しい浪速なみはや、難波なみばの上町台地の半島を回り込んで河内に入っていった。河内湾では荒々しかった波も穏やかになっていった。河内湾の北からは流量の大きい淀川が荒々しく流れ出していた。その淀川を避けて東の湾奥の現在の柏原市に近づいていった。

その柏原には奈良盆地から大和川が穏やかに流れ込んでいた。小さな舟に乗り換えて大和川の亀ノ瀬を抜けるとすぐに奈良盆地に入った。当時、その奈良盆地には大きな湿地水面が広がっていた。盆地の水面は波で荒れることもない。静かなこの水面を小舟に乗れば、広い奈良盆地の何処へでも行けた。この奈良盆地は実に交通の便のよい水郷盆地であった。

この奈良盆地の奈良がシルクロードという世界の交流軸の終着駅となった。シルクロードに乗って世界中の文明の結晶がこの奈良に届いた。世界中の文明が届いたこの奈良が繁栄しないわけがない。

飛鳥京、藤原京そして平城京と、この湖面の周辺に次々と都が建設されていった。日本で最初の本格的な都市が誕生した。

シルクロードという交流軸の上で日本文明が誕生した瞬間でもあった。

1000年の長い眠り

794年、桓武天皇は大和川流域の奈良から淀川流域の京都へ遷都した。

シルクロード交流軸のコースは大和川から淀川に移った。

・・・・・・大陸から来た舟は大坂湾に入ると真北に進み大きな淀川を遡っていった。枚方、山崎を過ぎると淀川三川が合流する巨椋池おぐらいけが待ち構えていた。その巨椋池の対岸の山裾が京都であった。

大坂から京都への淀川ルートが水運交流の主軸となった。

ところが、この淀川ルートは大和川ルートと決定的に異なる特徴を持っていた。大坂から奈良への大和川ルートは奈良で終着したが、淀川ルートは京都で終着することはなかったのだ。京都の上流には琵琶湖が控えていた。そのため、交流軸は京都から琵琶湖へと続き、さらにその先の陸路の街道へと繋がっていったのだ。

京都から滋賀の大津、そしてその大津から東海道や中山道という陸路の交流軸が生まれていった。東海道は大津から尾張(名古屋)、駿府(静岡)、江戸(東京)へ伸びた。もう一つの交流軸の中山道、甲州街道は濃尾(岐阜)、信濃(長野)、甲府(山梨)、そして江戸へと繋がっていった。

日本の歴史はこの交流軸の上で展開していった。この交流軸の上で人々や物や情報が移動した。この交流軸の上を戦国大名が走り抜け、そこで激しい戦いが繰り広げられた。

そして、19世紀の幕末には若き英雄たちがこの交流軸の上を激しく行き来して、江戸から明治近代への文明の大転換を行っていった。

ところが、この中世から近代にかけての1000年の間、この交流軸から外れていた土地があった。

奈良であった。

奈良時代、シルクロードの終着駅として奈良盆地は栄えた。しかし、淀川という交流軸が形成されると、そこから外れた奈良盆地は単に袋小路の土地となった。交流軸から外れた行き止まりの盆地、奈良は衰退していった。

奈良盆地には平城京の名残の寺社と田畑だけが残った。僧侶と神官とわずかな農民が住む奈良盆地は、日本の1000年間の平安、鎌倉、室町、戦国、江戸の歴史に忘れ去られていた。

日本文明を生んだ大都市、奈良は大いなる田舎となり、歴史遺産を抱えたまま1000年の深い眠りに入っていた……。

(略)

第18章 「二つの遷都」はなぜ行われたか

(略)

謎の平安遷都

794年、桓武天皇は奈良盆地を出て京都へ遷都した。

4世紀頃、畿内の豪族が連合して大和に統一政権を誕生させて以降、約400年間、権力の中枢と文化の中心は奈良盆地にあった。大坂の難波京や大津の近江京に政治中枢が移転したことはあった。しかし、それらは一時的であり、あくまで都は一貫して奈良盆地であった。

6世紀末に飛鳥京、694年に藤原京、710年に平城京が奈良盆地に次々と建設されていった。奈良盆地は日本文明を生んだ母なる盆地となった。

桓武天皇は、この母なる奈良盆地から出ていく決断をした。

この遷都は本格的でかつ徹底していた。784年にまず淀川のほとりの長岡京に遷都し、さらに10年後、長岡京から平安京へと移った。

朝廷や貴族たちはもちろん宮人、工人そして一般庶民のすべてが移動した。さらに宮廷の建材、瓦、内装装飾品は解体され持ち出された。奈良盆地には一部の寺社と農民以外は何も残らなかった。

それ以降の日本史は、琵琶湖—京都—大坂の淀川軸で華々しく展開されていった。

この奈良から京都への遷都には、未だに謎が横たわっている。

「桓武天皇が遷都した理由は何か？」である。

平安京への遷都の理由は、歴史家の間でも諸説ある。

一つは、道鏡をはじめとする仏教の影響から遠ざかるため。

一つは、桓武天皇は天智天皇系だったので、天武天皇系の奈良から離れるため。

一つは、藤原一族などの在来貴族の影響を遠ざけるため、などである。

歴史の専門家は文系である。そのため歴史の解釈は政治、経済、宗教など人文社会的なものとなっていく。人文解釈は実に多様であり、決め手がないまま果てしなく論議が続いていく。そのため謎は謎として、いつまでも残されてしまう。

私の歴史解釈は、地形、気象、インフラの下部構造からのアプローチを取っていく。

今回も同様である。つまり、奈良盆地が都に選ばれたのも、その後、奈良から脱出し京都へ遷都したのも、その原因は「奈良盆地の地勢」にあったと考えている。

奈良盆地が都になる必然

図1は、348ページの日本全国のうち、近畿地方を拡大したものである。

21世紀の現在の地形から見ると「なぜ、奈良盆地が都になったのか？」が理解ができない。

ともかく奈良盆地は大阪湾から離れていて内陸に入っている。さらに360度周囲は山で、他の土地との連絡も悪い。奈良はどこから見ても交通の要所とはいえない。

歴史の楽しみは、タイムトンネルを抜けて、当時の人々の気持ちになり、彼らの時間を追体験していくことである。

地形や地理に関しても同じである。現在の地形で歴史を考えると間違いを犯す。地形も時間と共に変化する。そのため地形もタイムトンネルを抜けなければならない。そして、当時の地形の上に立たなければならない。

第15章「日本文明を生んだ奈良は、なぜ衰退したか」と一部重複するが、なぜ奈良が日本最初の首都になったかを3～4世紀の地形の上に

図1 近畿地方の河川流域図



立ちシミュレーションしてみよう。

今の大阪平野は、当時は湿地帯であった。大坂湾は上町台地を回り込み内陸の奥まで入り込んでいた。

また、今の和歌山は堺市へ流れている。しかし、**奈良時代の和歌山は奈良盆地を出ると向きを北に変え、大坂湾に流れ出ている。**堺へ流れている今の和歌山は、江戸時代に掘られた人工の水路なのだ。

奈良が都になる4世紀頃、大坂平野の奥まで海と川が混じる湿地帯が広がっていた。まさに河内と呼ばれた地であった。

船で瀬戸内海から大坂湾に入り、上町台地を回り込み、和歌山を遡ると生駒山、金剛山の麓まで行くことができた。中国大陸から生駒山麓の柏原市まで直接舟で行けたのだ。柏原で小舟に乗り換え生駒山と金剛山の間を越えようと、もうすぐそこは奈良盆地であった。

この奈良盆地には、大きな湿地湖が広がっていた。その湿地湖を利用すれば奈良盆地のどこにでも舟で簡単に行くことができた。

奈良盆地全体が、大坂湾の荒波を避ける穏やかな自然の内港のようであった。

舟を利用すれば奈良盆地は便利がよく、ユーラシア大陸との連絡も容易であった。

奈良盆地が日本の都になったのは、地形から見て合理的であった。

しかし、この奈良盆地を抱える和歌山流域はいかにも小さい。348ページの図では豆粒ほどだ。

川の流域が小さいということは、資源が少ないということであった。

川の流域が支配する資源は「水」と「森林」であり、水は生命の源で、森林はエネルギーの源である。和歌山の流域の小さい奈良盆地は、この「水」と「森林」に限度があった。

変貌した奈良盆地

生物の中で人間だけが燃料がなければ生きていけない。文明の誕生と発展にとって燃料すなわちエネルギーは絶対的なインフラであった。19世紀に石炭と出会うまで日本文明のエネルギーは木であった。

エネルギーだけではない。日本の寺社、住居、橋、舟など、構造物はすべて木造であった。モンソーン地帯の日本は森林が豊かであり、木材は潤沢に手に入った。エネルギーであり資源となった森林は日本文明存続の大前提であった。

故・岸俊男氏（奈良県立橿原考古学研究所長）の推定では、平城京内外に10万から15万の人々が生活していたという。

また、作家の石川英輔氏によれば燃料、建築などで使用する木材は、江戸時代で一人当たり1年間で20~30本の立木に相当する量であったという。

奈良時代でも一人当たり最低10本の立木は必要であったと推定すると、奈良盆地で年間100万から150万本の立木が必要となる。いくら日本の木々の生育が良いといっても限度がある。毎年毎年100万本以上の立木を伐採していたのではたまらない。その量は小さな和歌山流域の森林再生能力をはるかに超えていた。

森林伐採がその再生能力を超えれば、山は荒廃する。

荒廃した山に囲まれた盆地は、極めて厄介で危険である。荒廃した山では保水能力が失われ、沢水や湧水が枯渇し、清潔な飲み水が消失していく。

また、雨のたびに山の土砂が流出し、盆地中央の湿地湖は土砂で埋まり奈良盆地の水はけは悪化していく。

水はけが悪くなれば、生活污水は盆地内でよどみ不衛生な環境となり、さまざまな疫病が蔓延していく。また、水はけが悪ければ雨のたびに水が溢れ、住居や田畑が浸水してしまう。

桓武天皇がこの奈良盆地を脱出し、和歌山より何倍も大きく「水」と「森」が豊かな淀川流域の京都に遷都したのは当然であった。

現在、奈良盆地の周囲の山々は見事な緑となっている。それは第8章で述べたように、淀川交流軸から外れた奈良盆地は、歴史から忘れ去られていたからである。この忘れ去られた1000年の時間が、奈良の山々を癒してくれたのであった。

「地勢的に、奈良から京都への遷都は必然であった。あのまま奈良盆地にこだわっていたら、文明は衰退し自滅していった」

これが、桓武天皇が平安遷都を行った私の解釈である。

引用者：関連・ご参照

京都を首都ならしめた琵琶湖ルート (<http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/30.pdf><クリックして下さい>)

日本史の謎は『地形』で解ける」[文明・文化篇]

第9章 「弥生時代」のない北海道で、いかにして稲作が可能になったか

(略)

悪夢の泥炭層

6000年前の縄文前期、海面は今より5m高く、札幌、江別、岩見沢の石狩地方はもちろん、美唄、砂川、滝川の空知地方の奥まで内湾であった。その後、寒冷化とともに海水面は低下し海が後退した内湾は、石狩川の土砂によって沖積平野へと姿を変えていった。

日本内地の沖積平野は、有機肥料を含み稲作に適した上地となった。しかし、寒冷地の北海道では堆積した植物の分解が進まなかった。土は植物が炭化した状態のまま蓄積されてしまった。それが泥炭層である。6000年間に堆積した泥炭層の深さは20mを超えていた。

泥炭は燃料には使えたが、稲作には適さなかった。入植者たちは重労働を繰り返し、表土の農作土を他から搬入した。しかし、下層の泥炭層はいやというほど水分を含み、搬入した農作土はすぐ腐食して使い物にならなくなった。水分を含む泥炭層は雪が融けてもなかなか乾かず、初夏になり乾燥しかけてもわずかな降雨でまた元の泥炭湿地に逆戻りした。

泥炭層の水を抜く。泥炭層の地下水を低下させる。それが人植者たちの生死の分かれ目となっていった。

泥炭層の地下水を下げるため排水路を掘る。しかし、石狩川の水位が高いので集めた水を排水することができず、強制的にポンプで排水しなければならない。しかし、当時の排水ポンプは入植者にとっては高価すぎて手が出なかった。

泥炭層の地下水を下げるには、目の前を流れる石狩川の川底を下げる以外なかった。石狩川の川底を低下させれば、石狩川の水位は下がる。石狩川の水位が下がれば、泥炭層の地下水も石狩川へ吸い出されて低下する

しかし、部分的に石狩川の底を掘り下げても、1年もたたないうちに再び土砂が堆積してしまう。石狩川の河口まで徹底的に川底をさらう浚渫をしなければ、本当の解決にはならない。しかし、開拓庁も入植者たちもあまりにも貧しかった。石狩川の川底を河口まで浚渫する資金もなく、大規模な浚渫工事の機械もなかった。

毎年毎年、入植者たちは絶望的な気持ちで泥炭層にしがみついていた。

Iア3 第9章E「弥生時代」のない北海道でいかにして稲作が可能になったか

執念のショートカット

1898(明治31)年、未曾有の大洪水が石狩平野を襲った。過酷な大地と戦った多くの仲間の命、そしてやっと開発したわずかばかりの田畑が濁流に呑み込まれた。

さすがに中央政府も、石狩川の治水に乗り出さざるを得なかった。数年後に勃発する日露戦争を前に北海道の国防上の重要性が浮上したこともあった。石狩川の治水と開発は国家的課題として認識された。

しかし、当時の日本は借金をしなければ戦争もできないほど貧しかった。貧しい予算で石狩川の洪水を防ぎ、泥炭層の地下水を下げるという2つの課題を同時に達成しなければならなかった。

北海道の未来がかかった困難な使命が、土木技術者たちに課された。

彼らは徹底的な石狩川のショートカット、すなわち捷水路計画を策定した。流れにくい蛇行部をショートカットして直線にする。このショートカットは内地でも実施されている一般的な手法である。

しかし、石狩川のショートカットは別の狙いを秘めていた。

ショートカットすると何か起きるか。蛇行部を直線にすると流れは一気に速くなり、洪水は短時間で流れ去ってくれる。内地の河川のショートカット効果はそれまでである。

ところが、石狩川では違う。石狩川の川底は柔らかい泥炭層である。流れが速くなると川底の泥炭は削られていく。川底が削られると石狩川の水位は下がる。水位が低下すれば泥炭層の地下水は石狩川に吸い出され、低下していく。

その狙いは見事に当たった。直線化で石狩川の流れは速くなり、川底は水流で削られて低下していった。川底が下がると、泥炭層の地下水は次々と川に吸い出され低下していった。石狩川の各地にはショートカットされた蛇行部の三ヶ月湖が残されている。その残された三ヶ月湖はすべて石狩川より高い位置に浮くように存在している。それが石狩川の川底が削られて低下したことの証となっている。

土木技術者たちは、今まで苦しめられてきた石狩川の流れの力を逆に利用したのだ。

(略)

日本史の謎は『地形』で解ける」[環境・民族篇]

第5章 なぜ日本列島は「生きたリン鉱脈」の宝庫なのか

・・・・・・有機栽培農業をするとき、カリやチツソは堆肥でどうにかまかなえる。しかしリンは不足しがちなので、リン鉱石による化学肥料を補給せざるをえない。

ところが、冬みず田んぼでは、そのリンが鳥たちの糞でまかなえるのだ。

・・・・・・小麦、大麦など大地を疲弊させる穀物の大量生産にとって、化学肥料は必要不可欠である。その化学肥料の原料のリン鉱石に黄信号がともったのだ。その黄信号は米国から発信された。

20世紀が終わるころ、米国がリン鉱石の輸出をストップしてしまったのだ。

リン鉱石は、地球のマグマから生まれた鉱石ではない。古代の鳥の糞の化石である。

米国のフロリダには、良質なリン鉱石が埋蔵されている。そのフロリダのリン鉱石の埋蔵量に限界が見えてしまった。米国のリン鉱石は残り10年、または20年の賦存量といわれている。米国はその枯渇を少しでも延命させるために、リン鉱石の輸出をストップした。

さらに21世紀に入ると、中国がリン鉱石の輸出に大幅な関税をかけ、中国からのリン鉱石の輸入が困難となった。

・・・・・・世界中のリン鉱石の賦存量はあと40年分か、50年分かの議論はある。しかし、断言できることがある。リン鉱石は、21世紀中には間違いなく枯渇してしまう。

世界人口の増加とリン鉱石の枯渇は確実であり、21世紀の世界的な「穀物逼迫」は100%間違いなく襲ってくる。古代の鳥の糞の化石の埋蔵量には限りがある。もちろん、日本列島には化石のリン鉱石はない。

ところが、日本列島には、生きたリン鉱脈があった。

渡り鳥が生きたリン鉱脈であった。

・・・・・・日本列島は、渡り鳥の世界的な中継地だった。渡り鳥のルートが集中する日本列島が、生きたリン鉱脈である・・・・・・。

冬みず田んぼの効果は、リンの補給だけではなかった。

冬みず田んぼでは、除草剤を使わない農業が可能となるという。つまり、冬みず田んぼには雑草が生えないので除草剤が不必要だというのだ。

これには少し説明が必要だ。

水を張った田んぼには、多くの微生物が発生する。とくにイトミミズが大量に発生し、そのイトミミズは糞を排出し続ける。そのイトミミズの糞と菌と泥が適当に混ざり合い、粒子の細かな「トロトロ層」が形成されていく。

このトロトロ層が形成されると、飛ばされてきた雑草の種はトロトロ層の下方に沈み込んでしまい発芽できなくなる・・・・・・。

さらに驚くことがあった。冬みず田んぼは除草だけではなく、害虫駆除にもなるという。

冬みず田んぼでは、害虫駆除の農薬が不必要になる。これも少し説明が必要だ。

田んぼに水を張って3月を迎えると、田んぼでアマガエルの産卵が行なわれる。その卵はおたまじゃくしになり、初夏には成長したカエルになる。

このカエルは食欲旺盛で田んぼの虫を食べ続ける。2003年に宮城県古川農業試験場がカエルを解剖して、胃の中の餌を調査した。その調査結果では、イネミズゾウムシやイネツトムシなど、稲にとっての害虫が60%以上を占めていたのだ。

田んぼのカエルの主食は稲の害虫であったのだ。稲はカエルに餌の生息地を与える。カエルは稲の害虫を食べる。稲とカエルは共生関係にあった。稲の害虫を退治するには、害虫の天敵カエルの力を借りればいいのだ。

害虫駆除の化学農薬を撒けば、その農薬に勝る害虫が必ず発生し増加していく。地球上に登場してせいぜい20万年の新人類の浅知恵が作り出した農薬など、何億年も生き抜いてきた昆虫に笑われてしまうのは当たり前だ。

農薬を撒いて楽な農業をしようとした人間が不遜だったのだ。そろそろ人間は、謙虚に自然界の知恵にすがって生きていく時期なのだ・・・・・・。

<この文書は、「**生駒の神話**」(下記 URL をクリック)に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>